

2023年12月9日、10日の二日間にわたって、東京大学の山中湖セミナーハウスにて、北京大の留学生とEAAユースの交流、及び日本の文化や自然を学ぶことを目的として、EAA山中湖フィールドトリップは行われ、私はEAAユース3期生として参加した。トリップの副題として、「イロニーとしての近代と廃墟としての自然」が掲げられていたが、王欽先生の参加が体調不良によって叶わなかったため、本題に沿って思索を深める試みは見送りとなった。王欽先生が参加されていたら、先生は、富士山や山中湖、セミナーハウス、演習林を見、何を思い、何を問いかけたのだろうか、また是非伺いたいところである。本トリップの主な内容としては、演習林の散策、映画『三島由紀夫 vs 東大全共闘 50年目の真実』(2020)の視聴、ほうとう作りであった。山中湖セミナーハウスを囲む、東大が所有する演習林の散策では、「癒しの森」というコンセプトの下、森が適切に、そして緩やかに、目的をもって管理・利用されていることを学んだ。落ちてきそうな枝の除去や、漆など危害のある植物への対処や、間引き・薪割りなどの環境維持に加え、木々をアーチ型に造形することで、野外にあって音響の良い「ステージ」を作り、NHK交響楽団を招待しコンサートを開催するなど、人間がどのように調和的に自然と向き合い、付き合っていけるかという、自然を支配、搾取し、消費し尽くしてしまうのではなく、自然の意志を汲みながら作業をしていくという試みは、近年、文化人類学の領域で注目されてきている「存在論的転回」と軌を一にする流れであるといえ、非常に興味深く感じられた。他方で、率直に言ってしまうと、「演習林」と言っても何の変哲もない、どこにでもある、それほど手入れのされていない林であるようにも感じた。しかし、だからこそ、山中湖セミナーハウスがそのような林に囲まれていることが、セミナーハウス玄関に掲げられた「山中無暦日、寒盡不知年」における「不知年」を体現し、自然の中に我々を匿い、世界から隔絶されて集中できる環境を作り上げているのだと感じた。

具先生紹介の三島由紀夫に関する映画は衝撃であった。恥ずかしながら、私はこの映画を見たことがなかった。三島や全共闘が何を考え、何を成し遂げたかったのか、それぞれの主義・主張は明確であったとしても、多義的な解釈が可能なのではないだろうかと感じた。そして、「解釈や理解」とは別に、もし三島が今を生きていたら、もしくは、私が当時を生きていたら、言葉や思考による理解や議論がどれほどの重要性を持っていたのだろうか。言葉のみならず、行動も、暴力も、力を、求心力を持たない現代にあって、「知」一般の位置について、致命的な問いを投げかけてくる映画であったと感じた。また、これは、「ポストモダン」以前の時代と言え、思想、社会、国家、天皇、などの抽象的で、記号や意味、制度、概念等の言葉によって形容されるものが彼らにとっては生死よりもリアルに、アクチュアルに、決定的に重要なこととして理解されていた。その上で、断片化や難解な理論に走ることなく、

重要なことが、それはすなわち現実的であることが、抽象的な言葉で、命を賭して交わされていた。「言葉が力を持った最後の世代」との論者による評価が、劇中紹介されていたが、まさしくその通りであると感じると同時に、三島は既に一步先に行っていたといえるのではないだろうか。平野啓一郎が三島を回想し、「言葉でしか制度はつukれない」ということを述べ、言葉の重要性への反省を促していたが、現在、言葉はますます無力化しつつある。戦略的なコミュニケーションが増加し、利益の伴う情報の交換が言葉の主要な機能となることで、つまり、シニフィアンが捨象・忌避され、シニフィエのみが重要となることで、世界は科学と暴力のみになりつつある。こうした時流を鑑みると、三島は「日本の近代」にあって、すでに、言葉や、共有される物語の限界を感じ、ポストモダンを生きていたといえないだろうか。また一方で、全共闘が、とりわけ芥正彦が、敗戦後の日本を、その敗戦の事実さえ無くすようなラディカルな仕方で乗り越えようとしていたときに、三島はあくまで天皇にこだわった。これは、三島が国家神道や、天皇をそのただ一つの極とする全体主義から抜け出していないという理解も可能かもしれない。つまり三島は前近代（日本の終戦前をこのように定義するならば）を生きていたともいえる。だとすると、三島と全共闘の邂逅は、「前近代」と「近代」の相克であった。三島が自決し、全共闘が自壊するとき、日本には何が残ったのだろうか。三島が、その猥褻さに嫌気がさし、天皇を裸にし縛り上げる日本の現状を憂うとき、三島が「対決」しようとした相手は誰だったのだろうか。アメリカか、アメリカの言いなりの日本か、それとも天皇か。三島は「対決」「決闘」とは何たるかを、ありうべき関係性とは何たるかをあの切腹をもって日本人に示したのであり、その関係性こそ、日本の前近代と近代を超克する可能性があるかと信じて止まない。

北京大生とも様々なことを話した。それぞれの研究の話以外にも色々話したが、全てが日本語で、中国語をほとんど話せなかったことが残念だった。留学生同士の中国語の会話に入ることができず、会話に入れるよう学習を続けなければいけないと強く感じた。末筆で恐縮であるが、本旅行の引率をして頂いた渡辺さんと具先生には感謝してもしきれない。夕食時を過ぎて帰寮するなど多大なご迷惑をお掛けしたことをお詫びするとともに、食事を残しておいてくれ、心配して下さった渡辺さん、私が食べ終わるのを待っていてくれた具先生には心から感謝するとともに、お二人がいなければ今回の旅行は無事ではなかったと確信するし、お二人の、全ての学生、特に北京大生への配慮や声掛けによって、皆が楽しく、そして学びの多い旅行にすることができた。本当にありがとうございました。また、深田さんを始め、EAA スタッフや RA の方々、EAA、東京大学のご尽力やご支援にも心より感謝いたします。来年以降も、薪割りを日程に組み込み、続けて頂きたいし、EAA の単独開催に限る必要はなく、例えば三鷹にある私立の国際的な大学などとも共同開催すれば、さらに実り多い体験ができるのではないかと感じた。

